説教20211121ダニエル7：9-14マルコ11：1-11「権威と尊大さ」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

私たちは命の節目に差し掛かった時、その来し方も、また行く末も峠のような高みから、わりあいはっきりと見通すことが出来るのではないでしょうか。そして永遠の命に繋がる私たちの歩みにおいて、その最も大きな節目とは、この地上を去り天に上げられる時でありましょう。

今日は、聖霊降臨後の最後の主日であり、来週からはアドベント第一主日に入るという、今日も又、節目の日に当たっています。今日の旧約新約の聖書箇所は、教会の暦において、よく選ばれる箇所ですが、それには訳があるように思います。ダニエル書ではついに天の国の有様が黙示され、「日の老いたる者」が登場し、マルコ福音書では、遂にイエス様がエルサレムへと入場されます。このように、それぞれの聖書箇所で聖書の語りはある節目を迎えているのです。

そこで今日は、その節目を迎えた高見より、私たち人間の尊大さと、主なる神の持つ権威と言うことについて見ていきたいと願います。ダニエル書7章 11節には次のように記されています。

さて、その間にもこの角は尊大なことを語り続けていたが、ついにその獣は殺され、死体は破壊されて燃え盛る火に投げ込まれた。

ここにダニエル書のモティーフの一つである尊大さが記されています。バビロンの王様ネブカドネザルは自分の権力の偉大さやバビロン王国の偉大さを誇り始めた時、主なる神に依って野の獣の暮らしに落とされ、牛のように草を食らう者とされました。そして、その試練の時を過ごすことによってネブカドネザルは打ち砕かれ、再びいと高き神をたたえ、永遠に生きる神をほめたたえる理性的な心を取り戻し、また主に依って高められたのです。

このネブカドネザルのように、私たち人間はこの地上生涯にあって何度も何度も自分の尊大さを、主なる神によって打ち砕かれながら歩まされているのではないでしょうか。尊大さと言うのは、カトリック教会では７つの大罪の一つに数えられるほどに、人間にとって大きな罪であります。尊大さと言う罪を抱えたままでは、どうやら私たちは無事に主の身元へと召天できないようであります。主なる神を黙示しているであろう「日の老いたる者」の有様は、「その衣は雪のように白く／その白髪は清らかな羊の毛のようであった。その王座は燃える炎／その車輪は燃える火、その前から火の川が流れ出ていた。」とうたわれています。そこには人間をすがすがしく迎え入れる主なる神の清らかさと同時に、どんな小さな罪をも見過ごしにせず、それを打ち砕かれる主なる神の激しさと、恐ろしさを見て取ることが出来るでしょう。

人間の尊大さと言うことを見渡してみますと、それが一人、王様のような地位が高い者の属性なのではなく、全ての人間が持つ属性であることが分かってくるでしょう。この聖書の中で、まったくあなたは尊大さと言う罪がなく、謙遜そのものであると、名指しで明言されたものはただ二人。それはモーセと主イエスであります。民数記 12章 3節には次のように記されています。「モーセという人はこの地上のだれにもまさって謙遜であった。」又、主イエスについては次のように記されています。マタイ福音書 11章 29節「わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしのを負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。」では、この二人以外の聖書に出てくる人物はどうなのでしょうか。彼ら彼女らは全て、多かれ少なかれなにがしかの尊大さを持っていたのではないでしょうか。例えばパウロは、多くの賜物と知識を持っていながら、「罪人のかしら」、「使徒の中では最も小さい者」と自らへりくだり、十字架だけを誇りとしてこの地上を歩みました。このようなパウロこそ尊大さとは縁がない、謙遜な人間の鏡と言えるかもしれません。ところが、そのパウロにもある時、尊大にならないようにと、主なる神からとげが与えられました。コリントの信徒への手紙二 12章 07節です「また、あの啓示された事があまりにもすばらしいからです。それで、そのために思い上がることのないようにと、わたしの身に一つのとげが与えられました。それは、思い上がらないように、わたしを痛めつけるために、サタンから送られた使いです。」何とも皮肉なことですが、主なる神からの啓示の事柄でさえ、人間が尊大になるきっかけになるということでしょう。パウロはそのことを深く悟ったので、わが身にささった刺をも恵みとして受け入れたのでした。

さて、あのパウロでさえこのように地上生涯を歩んでいたのです。いわんや我々をや、であります。私たちは、日々の歩みにおいて、小さな事で尊大になってしまい、それが良からぬ喜びとなってしまい、しかもそういったことに気が付いていないのではないでしょうか。

聖書の中に、尊大な人間の姿を探してみますと、例えば、ルカによる福音書 12章 54節から、「イエスはまた群衆にも言われた。「あなたがたは、雲が西に出るのを見るとすぐに、『にわか雨になる』と言う。実際そのとおりになる。また、南風が吹いているのを見ると、『暑くなる』と言う。事実そうなる。偽善者よ、このように空や地の模様を見分けることは知っているのに、どうして今の時を見分けることを知らないのか。」そして、ヤコブの手紙4章 13節から、「よく聞きなさい。「今日か明日、これこれの町へ行って一年間滞在し、商売をして金もうけをしよう」と言う人たち、あなたがたには自分の命がどうなるか、明日のことは分からないのです。あなたがたは、わずかの間現れて、やがて消えて行く霧にすぎません。むしろ、あなたがたは、「主の御心であれば、生き永らえて、あのことやこのことをしよう」と言うべきです。」などにそれぞれの人間のもつ尊大さがよく表れていることでしょう。このように私たちは、尊大さを、威張り腐った王様のような者にだけ当てはめるようなステレオタイプの発想から抜け出して、人それぞれが抱える、十人十色の小さな尊大さの方に目を凝らしていく必要があるでしょう。聖書はある意味恐ろしいことを言っていて、モーセ以外の人間は全て尊大であり、そのままでは救われないということを言っているのでしょう。例えば、賽銭箱に、生活費の全てであったレプトン銅貨２枚を入れた貧しいやもめもある意味尊大であり、目が見えるようにされた盲人もある意味尊大であったということです。こんな風に言ってしまいますと、身も蓋もないと思われるかもしれませんが、聖書は間違いなくこのように語っています。私たちが、この地上を歩む一歩一歩は、何かしら尊大な歩みであります。自分自身の意志や計画により頼み、主なる神の御心や計画を外れていく歩みを、私たちはいつも歩み出してしまうのです。そして、私たちはそのことに気が付いていません。ですから今日のような説教を聴けば或いは気分を害されるかもしれません。

私事で恐縮ですが、私は、神の召しにより別府不老町教会で伝道師として働くようになって１年８か月が過ぎようとしています。その間、私も多くの尊大な歩みをしてきたと思います。その多くは自覚がないまま過ぎ去ってしまいましたが、時に私は、１歩も前に進めなくなり、寝床に突っ伏していたということもありました。主なる神は私の尊大な歩みを止めさせるために、私にこのような仕打ちを成されたのでありましょう。そして思いますのは、この寝床に突っ伏している、と言うことは、すなわち、主の御前にひれ伏しているということではないかということです。一般的に、主の御前にひれ伏す姿は、礼拝堂で十字架を前にこうべを垂れている絵を思い出しますが、全てを主の十字架に委ね切っていて、そこに安らぎを見出しているという意味では、私のひれ伏しは、寝床の中で起こったのでした。そして、思いますのは、このように十字架にかかっている主イエスに、自分の全てを委ねた時にこそ、私の抱えていた尊大さは見事に打ち砕かれた、と言うことです。やはり私の数多くの尊大さを打ち砕いて頂けるのは、尊大さをひとかけらもお持ちでない主イエスにしかすることが出来ない御業だったのです。

さて、ここまでこの節目の時に、来し方すなわち、この地上でのことを見渡してみましたが、これからは、行く末、すなわち召天された後のことを見渡していきたいと思います。

今日のマルコ福音書の箇所は主イエスが、十字架にかかるために、エルサレムに入られた時のことです。主イエスはこの時、自分の意志を空しくして、まったく父なる神の意志に従って、歩んでいました。先程、尊大さのひとかけらもお持ちでない主イエスと申し上げましたが、それは、彼が100パーセント、父なる神の意志に従っていたので、彼は尊大であることを免れ、まったく謙遜な者であったのでした。しかし、御自分の意志を放棄し、父なる神の意志に従った主イエスには、不思議に人々を従わす権威が付与されているようです。それは、無理やり人々を従わせるような、人間が持つ権力とは異質の者の様です。今日のマルコ福音書の箇所には主イエスが天の国で実現される神の権威があらかじめ示されている様であります。

二人の弟子は、誰の者とも分からないロバを勝手にほどいて連れてきて、もし誰かが「なぜ、そんなことをするのか」と言った時には、「主が御入用なのです」と言いなさい、と主イエスから言われます。このやり取りで、主イエスは自分がいつ十字架にかかってもよい心構えを現しておられるようです。主イエスは、この世の権力者ならばきれいに避けて通る、突っ込まれかねないやりとりを敢えてなさいます。わかりやすく言えば、こんなやり方をすれば、或いは、泥棒扱いされかねないということです。そして、案の定、ある村人たちに「その子ろばをほどいてどうするのか」と言われます。そうすると弟子たちは主イエスから言われていた通り、「主が御入用なのです」と話して、そうすると、村人たちは許してくれた、と言うのです。私たちはこの地上での権力による支配や統治に慣れているので、この主の「主が御入用なのです」という御言葉一つで、人々が従順に聞き従っていくという成り行きに不思議さを覚えるのかもしれません。

でも、この後、聖書にはその不思議な成り行きが次々と起こることが記されています。「弟子の二人が子ろばを連れてイエスのところに戻って来て、その上に自分の服をかけると、イエスはそれにお乗りになった。多くの人が自分の服を道に敷き、また、ほかの人々は野原から葉の付いた枝を切って来て道に敷いた。そして、前を行く者も後に従う者も叫んだ。「ホサナ。主の名によって来られる方に、／祝福があるように。我らの父ダビデの来るべき国に、／祝福があるように。いと高きところにホサナ。」

いかがでしょうか、このように湖面に波紋が静かに広がっていくように、神の権威による従順や謙遜が人々の間に広がっていったのでした。

私たちは命の節目に差し掛かって、来し方と行く末を見通す時、両者の有様の違いに愕然とさせられるかも知れません。一方には人間の権力による尊大さがあり、一方は主なる神の権威による秩序があります。しかし、私たちはこの節目を乗り越える際に、各々の内にもある、見落としてしまうような小さな尊大さに目を向けなければなりません。そしてその尊大さを打ち砕いて下さるのは主イエスの十字架であります。その恵みを覚えこの一週間も主によって打ち砕かれる歩みを進めてまいりましょう。